

## 対話ができないテロ組織にどのように対応していくべきか

執筆者：永井陽右（2019年度採用）（8期生）

修学機関：早稲田大学社会科学部研究科地球社会論専攻国際協力研究

研究テーマ：第三世代 DDR における Reintegration Support の検討：アル・シャバーブの  
投降兵と逮捕者への取り組みを事例として

略歴（ながいようすけ）

1991年、神奈川県生まれ。大学一年次の2011年に日本ソマリア青年機構を設立、2017年にNPO法人化するとともにアクセプト・インターナショナルと改名し代表理事に就任。テロと紛争の解決をミッションに、主にソマリアなどの紛争地にて、いわゆるテロ組織の投降兵や逮捕者、ギャングなどの脱過激化・社会復帰支援、若者の過激化防止、テロ組織からの投降の促進などを実施。近年は国連（国連人間居住計画、国連ソマリアミッションなど）とも協働しており、国連人間居住計画では2018年よりCVE（暴力的過激主義対策）メンターや若者の過激化関連の専門家パネルとして政策立案やレビューなどにも従事。上記の実務と並行して早稲田大学教育学部複合文化学科、London School of Economics and Political Science 紛争研究修士課程を修了、2019年より早稲田大学社会科学部研究科地球社会論専攻国際協力研究に所属し実務活動とともにそれを活かした研究活動を実施。

-----

全世界的にテロリズムが重要な問題として認識されてから久しいですが、私たちは未だにテロとの戦いの中にいます。1年レベルでは毎年多少の増減はありますが、大きなトレンドで見ると残念ながら減るどころか上昇トレンドであったりもしています。やられたらやり返すという憎しみが連鎖していき、紛争地のような場所はもちろんのこと、イギリスやアメリカといった先進国とされる国々でも実に様々なテロが起きています。

世界には色々な紛争がありますが、コロンビアや南スーダンのような場所での紛争は、それこそこれまで人類が蓄積してきた紛争解決アプローチで曲がりなりにも紛争解決に向かっていきました。紛争当事者が対話できるように第三者などの仲介国や組織もうまく入りつつ、戦略的な対話を始め、包括的な和平プロセスに繋ぎでいき、最終的に和平合意を結んで

暫定政府を樹立し、そこから長きにわたる平和構築フェイズに移っていくというものです。

しかし、こうした確立された紛争解決アプローチは、あくまで前提として相手と話すことができるということが必要になります。他にも治安や政治的意志などいくつか重要な前提はあるのですが、簡単な話、例えばイスラム国やアル・シャバーブ、ボコ・ハラムなどといった所謂テロ組織（テロ組織よりも暴力的過激主義組織の方がよく使われますが）はそうした対話ができないわけです。こうした状況の中で、空爆や苛烈な地上戦と多数の市民を意図的に巻き込むテロ攻撃が繰り返され、ローカルでも、グローバルでも、憎しみの連鎖が強大になっていきました。この状態をどのように変えるのか、これこそが今問われています。

#### ■テロ・紛争解決の実務とそれと並行した研究の意義

そうした状況を踏まえ、私は大学一年次に NGO を立ち上げ、紆余曲折ありながらも今ではテロ・紛争解決のプロとしてその最前線の現場で仕事をしています。対話ができないからこそ、こちら側の姿勢を見せていく、組織ではなく個人にフォーカスを当てる、なぜテロ組織に入ったのかという背景を意識し受け止める、そうしたことを大切に、ソマリアのような紛争地でテロ組織から投降した人々と逮捕された人々の脱過激化と社会復帰の支援などを行っています。答えもないし、前例もない。だからこそその道を打ち立てるのだという想いでこれまで進んできました。

その中で、最前線の現場で活動しているからこそ言えることや検討できることがあることに気が付きました。それこそ国連機関の会義（例えば国連人間居住計画における Expert Group Meeting）やイベントで呼ばれ、現場のリアルや現場にある矛盾などを説明する機会にも恵まれる中で、そうした考えが確かなものになりました。研究者ではなく、実務者として、テロや紛争の無い世界の実現のために、自分は社会に何を還元し何を問うのか、そうした思考の果てに、実務の仕事をしっかり続けながらアカデミアや政策の領域でも貢献していこうと考えました。そして、持続可能性などを考慮しつつ、恩師がいる早稲田大学社会科学部博士課程に進学し、博士論文をまとめることに決めました。

近年では和平合意が存在しない紛争地においてテロ組織の投降兵や逮捕者の社会復帰支援という内容での Disarmament, Demobilization, Reintegration (DDR) が試行錯誤されてきており、そうした DDR はしばしば第三世代 DDR と呼ばれています。博士論文研究では、ソマリアを中心に活動するイスラム系暴力的過激主義組織アル・シャバーブへのそうした第三世代 DDR の取り組みを軸に、第三世代 DDR における Reintegration Support はどのようにして DDR プロセスとして機能させられるべきかを検討しています。まさに私の実務がこの Reintegration Support なのですが、取り組み自体は全く DDR ではなく、むしろはるかに危険で様々な困難が付きまとっています。そうした取り組みを DDR という広範且つ歴

史のある活動に実際的に組み込むことができれば、さらに多くの人々を巻き込むことができ、テロと紛争の解決に大きな貢献ができると考えているため、今後も引き続き実務活動とともに研究活動にも邁進して参ります。



(ソマリアの首都モガディシュにある中央刑務所にて、投降兵へのカウンセリング)



(現場では最高レベルの防弾チョッキなどに加え防弾車と護衛を付けて活動しています)